

## ヨハネによる福音書2章19節 「建て直す体」

### 1A 御子であることの印

1B 父の家

2B 聖誕

### 2A ヨナのしるし

### 3A 神殿の再建

1B 神の下さる建物

2B イエスの用意される家

### 4A 復活の希望

1B 御子の公現

2B 福音の実質

3B 主との再会

4B 御国の到来

## 本文

ヨハネによる福音書2章を開いてください、私たちの聖書通読の学びはヨハネ1章まで来ました。午後に2章全体を一節ずつ学びますが、今朝は19節に注目してください。「イエスは彼らに答えられた。「この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。」」

ここは、イエス様と弟子たちがエルサレムに行って、イエス様が宮清めを行われた時です。といっても、イエス様が十字架に付けられる最後の週にエルサレムに入られた時の宮清めではなく、ヨハネは主が宣教の働きを始められた始めにも、宮清めを行われた時のことです。イエス様は、宗教指導者らに対して、「2:19 この神殿を壊してみなさい。わたしは、三日でそれをよみがえらせる。」と言われました。しかし、主は、そこの物理的な神殿のことを話しておられたのではなく、ご自分の体のことを話しておられました。ご自分の肉体を建物に喩えて、それでご自分を壊してみなさい、というのは、彼らがこの方の体を滅ぼすこと、十字架に付けることを意味しています。しかし、イエス様は三日目に甦るのだ、ということ語られています。

私たちは今月に入ってから、神が肉体を取られたこと、受肉について見て行っています。クリスマス、つまりイエス様がお生まれになったということは、神が人となったこと、神が肉体を取られたことに他なりません。「1:14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。」と使徒ヨハネは言いました。そして覚えているでしょうか、ここの「間に住まわれた」という言葉は、直訳は「幕屋を張られた」ということです。モーセの幕屋が建てられましたが、それは主なる神がその中に住まわれて、祭司を通して人々に語られるためでした。聖なる神が、汚れある人間にどのように近づく

のか？それが幕という仕切りを作り、そして祭司が血を流していけにえを献げることにより、初めて主の前に近づけます。そして、ヨハネはここで、神が取られた肉体そのものが、仕切りの幕になっているということです。イエス様が人としてこられたから、この方であって父なる神のまま近づき、共に住むことが許されるようになったということです。

そして今、イエス様はこの体が、二度と朽ちぬ体として甦ることを語られています。受肉が、私たちの肉体の弱さを身にまわれ、罪を負われたのであれば、復活は、その罪を完全に葬り去り、滅ぼし、勝利されることの希望です。

## 1A 御子であることの印

### 1B 父の家

神殿の境内にいるユダヤ人指導者たちは、かなり強くイエス様に迫ってきました。「2:18 こんなことをするからには、どんなしるしを見せてくれるのか。」こんなことというのは、羊や牛を宮から追い出し、両替人の台をひっくり返したことです。何よりもイエス様の次の言葉が彼らを怒らせました。「2:16 わたしの父の家を商売の家にしてはならない。」聖なる神のことを、まるで自分の個人的なお父さんであるかのように呼んだからです。天地を造られた、すべてを超越する神が、自分の父と言っているということは、まさにご自身が神と同一にしている、神の独り子であり、神ご自身だということにしているに他ならないからです。それで、そこまで言うのであれば、そんな権威があることを示すしるしがあるのかな？と問い詰めているのです。

### 2B 聖誕

イエス様が、父なる神の御子であることは、すでにご自身の降誕において、しるしがありました。預言者イザヤは、ダビデの家におけるしるしは、処女が身ごもることであるとしました。「7:14 見よ、処女が身ごもっている。そして男の子を生み、その名をインマヌエルと呼ぶ。」事実、マリアはまだヨセフを知らないのに、イエス様をみごもりました。それから、羊飼いたちに天使が現れた時に、「ルカ 2:12 あなたがたは、布にくるまって飼葉桶に寝ているみどりごを見つけます。それが、あなたがたのためのしるしです。」羊飼いたちが見に行くと、はたしてその通りでした。使徒パウロは、コリント第一の手紙で「ユダヤ人たちはしるしを求めますが、しるしは、聖書では、しるしがあつて、初めてイエスが神からの方であることが明らかにされていったのです。

## 2A ヨナのしるし

パリサイ人たちが、「マタ 12:38 あなたからのしるしを見せていただきたい。」と言ってきた時、イエス様は、「悪い、姦淫の時代はしるしを求めますが、しるしは与えられません。ただし預言者ヨナのしるしは別です。ヨナが三日三晩、大魚の腹の中にいたように、人の子も三日三晩、地の中にいるのです。」と言われました。そこから、イエス様は三日目に墓の中から甦ることが、ご自身がキリストであることの最終的な、究極的なしるしであることを語られましたが、ここでも同じですね。

「三日でそれをよみがえらせる。」と言われました。

### 3A 神殿の再建

イエス様が、このことを語られた時に、その意を介していた人はそこには、誰もいませんでした。弟子たちでさえ、それがご自身の体のことを示していると、主が甦られてから知ったことが書かれています。ユダヤ人指導者は、今、宮清めをイエスが行われたここにある神殿の建物であることを語っていると思っていました。46年経っても、まだ完成していなかったヘロデ神殿ですが、三日で建て直すとお前は言うのか？と問いただしています。

### 1B 神の下さる建物

しかし、使徒ヨハネは、福音書の冒頭から神が肉体を取られて、住まわれたことを、「幕屋を張られた」と語っていましたし、彼にとっては、肉体を建物に喩えることは特段におかしなことではありませんでした。使徒パウロも、人の復活について、天幕と建物に喩えている箇所があります。「Ⅱコリ 5:1-4 たえ私たちの地上の住まいである幕屋が壊れても、私たちには天に、神が下さる建物、人の手によらない永遠の住まいがあることを、私たちは知っています。私たちはこの幕屋にあっとうめき、天から与えられる住まいを着たいと切望しています。その幕屋を脱いだとしても、私たちは裸の状態にいることはありません。確かにこの幕屋のうちにいる間、私たちは重荷を負っとうめいています。それは、この幕屋を脱ぎたいからではありません。死ぬはずのものが、いのちによって？み込まれるために、天からの住まいを上に着たいからです。」

人は、そもそもが肉体だけでできているわけではありません。「創 2:7 神である主は、その大地のちりて人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。それで人は生きるものとなった。」神が造られた肉体がありますが、それは神のいのちによって生きるものとなった霊を入れる器なのです。本当の自分は霊であって、この体は霊を表現する器でしかありません。今、私の右腕がなくなっても私はなくなりません。左腕がなくなっても、そうです。右足、左足がなくなっても、そこには私はいません。私は心臓の中にいるのでしょうか？脳の中にいるのでしょうか？違いますね、この肉体ではないどこかに私がいて、その私が肉体を通して表現されているのです。

パウロは、今の肉体を幕屋、テントと呼んでいますが、後で神からのちゃんとした建物が与えられると述べています。テントは数日いるには良いところですが、長くはいることはできません。非常に不便です。同じように、私たちの体はしだいに衰えます。それを否定するのは若い人ですが、けれども運動などをして怪我をしたら、やはりテントにしかならないことに気づくはずで、これは一時的であり、キリストを信じる者には復活の体を与えられるという約束が与えられています。それは衰えることもなく、朽ちることなく、完全な体です。

### 2B イエスの用意される家

そこでイエス様は、ご自身が甦られ、ご自身を信じる者には住まいを用意すると約束されました。「ヨハ 14:2-3 わたしの父の家には住む所がたくさんあります。そうでなかったら、あなたがたのために場所を用意しに行く、と言ったでしょうか。わたしが行って、あなたがたに場所を用意したら、また来て、あなたがたをわたしのもとに迎えます。わたしがいるところに、あなたがたもいるようにするためです。」ここでイエス様が言われているのは、物理的な住まいではなく、まさにパウロが語っていた復活の体なのではないでしょうか？イエス様が、私たち一人ひとりのために、新しい、天に属する体を用意してくださっています。そして、それが用意されたら、主は一人一人をご自身のもとに迎えられます。教会の携挙です。

したがって、今の体で何をしているかはとても大事だし、そして、将来に受ける体と連続しているということです。「Ⅱコリ 5:10 私たちはみな、善であれ悪であれ、それぞれ肉体においてした行いに応じて報いを受けるために、キリストのさばきの座の前に現れなければならないのです。」

#### **4A 復活の希望**

間もなく2019年が終わろうとしている時に、私たちは終わりの日について想いを巡らすことはよいことだと思います。キリストが肉体を取られて、神が私たちに近づいてくださったのがクリスマスであれば、その体が復活し、キリストに結ばれている者たちも同じように復活するというのが、終わりの日に起こります。そして、今、この器であり、幕屋である肉体において、何を行ったかによって、終わりの日に報いが定められるのです。

#### **1B 御子の公現**

まず、イエス様が三日目に甦られることによって、確かに神の御子であることを公に現わされました。「ロマ 1:3-4 御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活により、力ある神の子として公に示された方、私たちの主イエス・キリストです。」死者の中から甦ったということは、この方がその主張しておられることの通りなのだということです。もはや、だれも弁解することはできません。イエス様のことをほとんど聞いたことがない人たちであっても、誰であっても、イエスの甦りは、すべての人に悔い改めを呼びかけているものとなっています。「使 17:30-31 神はそのような無知の時代を見過ごしておられましたが、今はどこでも、すべての人に悔い改めを命じておられます。なぜなら、神は日を定めて、お立てになった一人の方により、義をもってこの世界をさばこうとしておられるからです。神はこの方を死者の中からよみがえらせて、その確証をすべての人にお与えになったのです。」

#### **2B 福音の実質**

そして、イエスがもし甦らなかったのなら、私たちのしていることのすべてが空しくなります。「Ⅰコリ 15:17-19 そして、もしキリストがよみがえらなかったとしたら、あなたがたの信仰は空しく、あなたがたは今もなお自分の罪の中にいます。そうだとしたら、キリストにあって眠った者たちは、滅ん

でしまったこととなります。もし私たちが、この地上のいのちにおいてのみ、キリストに望みを抱いているのなら、私たちはすべての人の中で一番哀れな者です。」イエス様が甦ていなかったとしたら、罪の赦しといっても、何の確証もないですから、罪の中にいます。復活がなかったら、すでに死んだ人たちはただ死んだだけで、滅んでしまいました。ですから、私たちこそが最も哀れで、みじめな人間になってしまうのです。けれども、甦ったのであれば、私たちの信じている福音には、実質があるということであり、命をかけるに値するものなのです。

### 3B 主との再会

そして、復活があるから、主が戻ってこられる時に、私たちは、すでに死んだ人たちと共によみがえって、この方にお会いすることとなります。「I テサ 4:15-17 私たちは主のことばによって、あなたがたに伝えます。生きている私たちは、主の来臨まで残っているなら、眠った人たちより先になることは決してありません。すなわち、号令と御使いのかしらの声と神のラツパの響きとともに、主ご自身が天から下って来られます。そしてまず、キリストにある死者がよみがえり、それから、生き残っている私たちが、彼らと一緒に雲に包まれて引き上げられ、空中で主と会うのです。こうして私たちは、いつまでも主とともにいることとなります。」すべての人は甦るのです。すべてキリストにある者は甦ります。それは主が戻ってこられる時にそうなるのです。しかし、まだ生き残っている時はどうなるのでしょうか？ 私たちが死なないうちに主が戻ってこられたらどうなるのでしょうか？ コリント第一 15 章にも書いてありますが、一瞬のうちに変えられるのです。死んで新しい体に生き返るのではなく、生きているうちに一瞬において変えられます。

### 4B 御国の到来

そして、その復活の体をもって、神の栄光を現し、キリストの似姿へと変えられています。そしてキリストが地上に再臨される時に、栄光の輝きをもって私たちも戻ってくるのです。「コロ 3:4 あなたがたのいのちであるキリストが現れると、そのときあなたがたも、キリストとともに栄光のうちに現れます。」ローマ 8 章では、神の子の現れとあります。そして被造物も、栄光の姿に変えられて、解放されて、神の国の自由の中に入れられます。こうやって、神の国を相続するのです。

ですから、私たちは自分の家で何をしているのでしょうか？ 言い方を変えれば、自分の肉体において何をしているのでしょうか？ パウロは、自分の体はもはや自分のものではなく、聖霊が住んでおられる神の宮だといいました。いつしか、新しい体に変えられるのです。その時に報いを受けます。そして、まだイエスを知らない人々は、イエスが死者の中からよみがえられたことを信じがたいこととしているのでしょうか？ この方がよみがえったのは、最後のしるしであるとされたように、それ以上のしるしはないのです。